



年間テーマ ～ 互いに耳を傾けよう ～

これが沖縄県の現状だ！



地上でもっとも小さいといわれている種子。
それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人にあよび、
互いに尊重し合い、
愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると
約束しました。

今月のテーマ

沖縄

写真：沖縄の風景

提供

金井 創 牧師 (日本キリスト教団佐敷教会)
山田 至吾 さん (那覇教区信徒)

カトリック大阪大司教区
社会活動センター・シナピス

TEL/06-6942-1784 FAX/06-6920-2203

Email/sinapis@osaka.catholic.jp

ホームページ/https://sinapis.osaka.catholic.jp/

「沖縄『返還』50周年に祈る」

芦屋教会主任 川邨裕明

ここ数年、大人の修学旅行と称して、沖縄への平和学習の旅を続けています。平和学習として戦跡や基地を巡って真剣に学んだあとは、ちょっと贅沢なホテルに滞在して地元で活動するアーティストのライブや観光を楽しみます。沖縄の様々な面を体感する旅になってきています。幸いなことに、コロナ禍にあっても少人数ながら続けることができました。

今年、5月15日は沖縄「返還」50周年の祈念日でした。ただ単純に「おめでとう」と言えないところが、沖縄の複雑な状況を反映していると思います。沖縄を知ることは、戦争の本質を知ること、日本の戦争責任を考えること、基地問題は日本の現実を知ること、沖縄からアジアの現実が見えてくることなのです。さまざまな立場や考え方の違いが入り乱れ、一つになれない状況の中で、それでも苦しみながら方向性を見出そうともがく沖縄の今を見据えることは、いま私たちが置かれている現実を見分ける眼力を磨くことにつながっていると思います。

さて、今回の平和学習で初めて訪問したのが、ヌヌマチガマです。沖縄では鍾乳洞や壕のことをガマと呼びます。沖縄戦の時、日本軍が地下壕として司令部や野戦病院にしたり一般市民が避難したり、しました。いくつかのガマが整備され、見学できるようになっています。懐中電灯と軍手をしっかり準備してガマに向かいました。到着した私たちを待っていてくださったガイドさんが、いきなり「なんでここにきたの？」と質問されました。その意味を見学中に思い知らされることになりました。鍵を開けてもらって入ったガマ、いきなり急な階段が現れ、その先には急な斜面とかがんでも頭を打つような狭い通路、水が流れぬかるむ足元、難所の連続でした。それだけに当時このガマにいた人々の苦労がしのばれました。奥行きは長く、深く、そしてとても広い場所もありました。そこにたくさんの人が米軍の攻撃に息をひそめていたのです。太陽の差し込む広場で沈黙の祈りを捧げました。来年もさまざまな戦跡を巡りたいと思っています。



*8月には沖縄をテーマにした「平和の集い」を予定。

(→詳細は20ページ)

今月のページ

ニュースレター 目次

- 1 巻頭言
- 2 シナピスの風
- 3 子どもたちに伝えたい平和<前編>
- 5 ②子どもの本で平和をつくる
- 6 時報6月号より
- 9 障がい者委員会より
- 11 助けてください
- 12 祈りの集い
- 13 ホームだより
- 15 ちょっと聞いて
- 16 カジノ建設 住民投票をやろう その後
- 17 ガリラヤの風
- 19 シナピス工房だより
- 20 みんなのけいじばん
- 22 あとがき

チラシ・ご案内

- ・シナピスの風
- ・6月の祈り
- ・忘れないあきらめないカレンダー
- ・第56回「世界広報の日」教皇メッセージ
- ・司教協議会声明文
- 「日本を故郷と思っている子どもたちとその家族を追い出さないでください。一人でも多くの人に在留特別許可を与えてください」
- ・J-CaRM 声明文
- 「包括的で公正な難民保護制度の確立を」
- ・第一回シナピス主催絵画コンテスト作品募集
- ・映画の案内
- 「スーパとイデオロギー」
- 「ドンバス」

年間テーマ

～互いに耳を傾けよう～

これは教皇フランシスコが数々のメッセージの中で、私たちに何度も呼びかけていることばです。身近なことから世界に至るまで、互いを思いやれないことで生じる衝突が後を絶ちません。この言葉を受け、交わりを通して互いを理解し尊重しあえる平和の実現を目指します。このニュースが皆さまと一っしょに考え、わかちあいの場となることを願っています。

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス（からし種）です。

イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、愛し合うように願って平和の種をまき、やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

シナピス年間テーマ ～互いに耳を傾けよう～

シナピスの風

* 行事はコロナ感染症の影響で延期または中止になることがあります。ご参加の際は連絡先にお問い合わせください。

第 149 号 2022 年 6 月 1 日発行

6 月の祈り

子どもたちと一緒に平和を祈りましょう

平和を愛する神さま、
わたしたちも
世界の平和のためにいのりします
いまも世界のどこかで
苦しんでいる人たちがいます。
世界中の人たちが戦争やありそいをやめて、
平和に生きることができるように助けてください。
わたしたちも
アジアや世界のともだちと手を取りあって、
平和のために
はたらく人になれるようにしてください。
わたしたちのイエスさまの名によって。
アーメン

(1994 年 広島司教認可)

(「平和の祈り」・日本カトリック正義と平和協議会編)

シナピスでは、毎月のお祈りをニュースレターとともに送らせて
おります。教会で、ご家庭で、日々のお祈りにお使いください。
シナピスのホームページからも、ダウンロードしていただけます。

シナピス工房 だより

ジュートたわし リニューアル!

みなさまにご愛用頂いているジュートたわしが、
この度リニューアルしました。これまでのジュートを編
んだものから、ジュートのコーヒーストを洗ってほめて
縫い合わせました。

天然素材のため土に戻ります。脱プラスチックを目指
し、環境に優しいエコたわしを是非お試しください。

「アベノマスク」を覚えておられますか?



あの廃棄されそうになった「マスク」
シナピスはいち早く引き取りに申し
込み、先日ようやく 1000 枚が届
き日々手にする布巾にリメイクしました。

その他

カタログ Vol.3

(注文書付) あります

シナピス HP

から→



☆シナピス工房メール会員募集中! ☆
最新のカatalogが出来次第お送りいたします。

登録希望のメールアドレスから
下記メールアドレスへ連絡もしくは
右側の QR コードからご登録ください。

メールアドレス: sinapis@osaka.catholic.jp



シナピス ～世界の平和のために祈る～

オンライン祈りの集い

6月9日(木) 20:30～(30分)

テーマ: 沖縄のために

開催方法: Zoom (100 名まで参加可能です)

参加用 ID&パスコード、QR コード↓

ミーティング ID: 761 071 2034

パスコード: 123456



シナピスカフェ

★毎週水曜日 13 時ごろ～16 時ごろ

6 月の開催: 1・8・18・22・29

★月 1 回土曜日 11 時ごろ～16 時ごろ

6 月の開催: 15(土) 軽食付き

シナピスホーム: 生野区中川 6 丁目 6-23 ☎: 080-8940-8847



人の世に熱あれ、人間に光あれ

— 水平社宣言 100 年シンポジウム —

日時: 6 月 11 日 (土) 14:00～17:00 場所: サクラファミリア

シンポジスト: 朝治武さん (大阪人権博物館館長)

駒井忠之さん (水平社博物館館長)

コーディネーター: 松浦悟郎さん (名古屋教区司教)

共催: カトリック大阪教区管区部落差別人権活動センター

日本カトリック部落差別人権委員会

無料

☎075-366-6609

✉buraku@kyoto.catholic.jp

是処青山「死刑を止めよう」宗教者ネットワーク

第 32 回死刑廃止セミナー

日時: 2022 年 7 月 12 日 (火) 18:30～20:00

場所: カトリック大阪大司教区本部事務局 1F 集会室

講師: 李 哲 〈イ チョル〉 さん

配信: YouTube にて LIVE 配信

(申込不要) <https://tinyurl.com/m9yzn885>

主催: 「死刑を止めよう」宗教者ネットワーク

共催: シナピス / アムネスティ 他

連絡先: kaiho@higashihonganji.or.jp 携帯 090-4571-5510 (阪本)

資料代
500 円

支援のお願い

パスタ、体温計はおかげさまで沢山のご協力をいただきました。

日持ちのする食品、ハラル食品、不織布マスク、
米などのご支援をお願いいたします。

感謝



＝ボランティア大募集中!＝

ミシンで縫物をしてくださる方を募集
しています。シナピス工房の作品作り
をお手伝いしてください。自宅での作
業も大歓迎です。
ご興味がある方はシナピスまでご連絡
をお願いします。



カトリック大阪大司教区 社会活動センター シナピス

Tel 06-6942-1784 Fax 06-6920-2203

URL: <https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

「点訳版」「音訳」

ご希望の方はシナピスまで
お申込み下さい。

子どもたち 伝えたい平和



北朝鮮からの引揚げ 薄れゆく記憶の中のスクラップ

山田美保子(那覇教区)

昭和 20 年の夏、「沖縄が全滅した」と父(36 歳)が泪しながら母(32 歳)に話しているのを聞いた。私、小 6(11 歳)。当時、所々で千人針「武運長久」を道行く人々に頭を下げて呼びかけていた。同級生の姿もあった。私も一人一人に赤い糸で縫い玉をしてあげた。時折、空襲警報のあの不気味なサイレンが鳴る。夜は灯火管制。そのような状況でありながらも戦地へ赴く兵士へ慰問を、わが校からも出し物を、このことで学校で練習に励んでいた。夏休みだった。

8 月 14 日の昼下がり、母が私にモンペの上下を作ると云う。父は体調を崩していたので、弟(6 才)とお留守番。妹と 3 人で出かけた生地屋さんで銘仙の花柄を選んでいたが、母が急に帰ろうと云って店を出た。せっかく街に出たのに他の買い物もしないで家路を急ぐ。家につくと何やらあわただしい。あの店でただならぬことを耳にしたのだと察した。街はそのような気配はなかった。父は動けないので母と荷をまとめる。持てるだけ、私、初めての徹夜だった。15 日朝、まだ暗いうちにおにぎりを作り、身支度する。母は妹を背に、夏なのに、ネンネコ(綿入れ)を巻き付け両手に荷物。玄関を出て、窓越しに最後かもしれない父と言葉をかわす。私はリュックをかつぎ、弟の手をひき、先に歩き出す。交通手段はない駅まで 4 キロ。昨日

の店の前を通るも駅に急ぐらしき人の姿は見あたらない。ようやく着くと、ホームは人、人、人。そして構内に入ってきたのは黒い鉄の貨車だ。いきなりガチャンと聞く。まさかと思っていると、人々は我先にと乗り込むのである。ワラが敷いてある。ためらっている場合でない。黒い物体に飲み込まれるように乗り込んだ。満員になるとガチャンと閉まる。真っ暗。高い位置に小窓があるだけ、馬糞のにおい。軍馬輸送車なのだ。文句云う人も、泣く子もいない。おそらく皆さんも昨夜一睡もしていないように寝入っていた。ガチャンと戸が開く。まぶしいこと。降りてすぐ集団について行き、集会所らしきところについた。その夜大人たちが声を出して泣いている。日本が負けたのだ。数日後、父と再会。連絡手段もないのに不思議に思えた。

そこを発つ日が来た。今度は普通列車だ。列車が走り出した。聞きなれていた「元山」のプレートが見え通過した。誰もが明日あたりは船に乗れると信じていたと思う。が、何やらざわめきだした。「元山」のプレートが逆方向に見え、通過。引き返したのだ。アア。威興で降ろされた。校舎らしきところに。一時的な収容所なのだ。何日かして日本人が居住中の個人の家に分けられた。一軒に 5 所帯程だったろうか。若い夫婦と二人の子がいた。ある日 3 才の女の子が息を引き取った。最初の死者。母親

は声の限り「アサ子ー」と。あくる日1才の男子も。知らぬ地に前例もない。この子たちを葬るにはあまりにも痛々しい。風の便りに母親は発疹チフスで亡くなられたと聞いた。

10月、木枯らしの吹く日々。稲刈り後の田んぼで落穂ひろいをする。誰とはなくピンにモミを入れ棒でつつく。ミニ精米である。その後転々と場所が変わる。今度は興南。海まで歩けば10分程。道路の両側に兵舎がある。右側はロシア兵と日本兵捕虜の寮。左側が我々の収容所になる。一部屋6畳ほどに13人2世帯。カマスを敷いてある。一所帯に寝具とは名ばかり、綿を抜き取った掛フツンの1枚だけ。母が持ってきたネンネコが重宝した。5人で体を寄せ合って寝る。

12月3日、父が突然押し入れの棚に上ろうとする。「お父さんどうしたの?」「おれ先に行くからお前たち後から来いよ」。意識もうろうとしている。「お父さんこれ船じゃないよ」。何とか落ち着かせる。今度は天皇ご一家のおひとりづつ、長女宮様から今上天皇までお名前をはっきりとよみあげる。きっと自分の母、弟妹達の名を重ねているのだらうと思った。その夜明け方(4日)、私の足を蹴るがごとく?息を引き取ったことを知った。周囲のことも気遣い、母も私も声をこらえて泣いた。母は父の髪の毛と爪を切り、紙に包み、ふところに。まもなく男の人が来て父のなきがらをムシロにくるんで運び出す。寮の片隅に遺体が積まれている。年の暮れに妹も母に抱かれたまま、静かに眠る。体が冷たくなると頭のシラミが髪を伝わって出てきた。妹よあわれ。栄養失調で、ほとんど泣くこともなかった。父同様に髪と爪を切る。そして運び出される。積まれた遺体はトラックでどこへやら。

明けて21年。同室のきれいなお姉さんが黒髪をトラ刈りにして顔にはカマドの黒いススをぬり、弟さんの服を着ていた。時々ロシア兵

がのそきに来る。外では「ダワイ、ダワイ」(おいで)の音が聞こえる。

この寮に来た時(12月3日)、母がどこからか四角い空き缶を持ってきた。なけなしのコメをスプーン一杯ほどに水を一杯入れて、水粥を炊く。5人ですする。父の時計はいつしか食費になっていた。私はロシア兵のスキを見て海に行き、人の見まねでクラゲを取ってくる。膝までつかっても冷たさは感じない。クラゲはタンパク質になると信じて、それを母が刻んでおかゆに入れて炊く。私は足を水洗いするでもない。まるでやせた乾物である。

いつしか足の指の凍傷が治っていた。弟は腹がふくれていた。道端でオモニ(お母さん)たちがリンゴをカゴに山盛りにして売っていた。弟に食べさせたいと母はどんなに思ったことだろう。通るたびに良い香りが空腹にこたえる。

(続く)



*山田美保子さんはシナピスがお世話になっている山田圭吾さんのお母様です。

「母は、書き始めたのが2020年からで、少しずつ書いてまとめるのに時間がかかりました。21年6月に寝たきりになってから何とか整理したのが7月くらいでした。」

同年12月1日に帰天されました。

(享年88歳)



子どもの本で平和をつくる ②

多湖敬子



なかむしせいとく

作・絵：たじま ゆきひこ

出版社：童心社

価格：¥1600＋税

これは なかま せいとく という8歳の男の子の視点で語られる、沖縄戦の話です。

時は1945年。戦況がきびしくなっていく中、父は兵隊になって島を出ていき、中学生の兄までも、軍隊に入ることになりました。

3月のおわりごろ、アメリカの軍かんが、島をとり囲み、すぐにでも攻めあがってきそうな頃、せいとくは、母と妹のきぬ子と一緒に、安全な場所を求めて家を捨て、南へと逃げていくことになります。昼間は森の中に隠れて、飛行機のとばない夜に歩くのですが、やっとガマ（洞窟）を見つけて入ろうとすると、日本兵から「作戦の邪魔だ」と追ひ払われます。途中、母を亡くし妹とも一時離ればなれになりながらも、戦禍をくぐり抜けたせいとくは、物語の終わりにこう語ります。

「戦争がおわって 十年になります。ぼくは高校生、きぬ子は中学生になりました。ぼくたちは みんなといっしょになって 畑をつくりました。やっと 作物がとれるようになったとき、てっぼうとブルドーザーで、アメリカーに 土地を とりあげられてしまいました。たくさんの軍事基地が、畑の上にできました。いまはアメリカーに、占領されています、でも、沖縄が日本にもどったら、こんなものは、すぐに なく

してしまうさあ。だって、戦争のくるしみを 一番しているのは、ぼくたちなんだから。」（本文より）

2022年5月15日。沖縄本土「復帰」50年を迎えました。せいとく の思いは叶っているのでしょうか？

作者の田島征彦さんはインタビューで次のように語っていらっしゃいます。

「これまで沖縄に 40 年以上通い続けてきました。その中でずっと考え続けてきたことは『もしもあの戦争中に、僕自身が沖縄にいたらどうしていたか』ということです。

僕自身、大阪の堺市で戦争は体験しましたが、沖縄戦は体験していません。絵本を創るときはいつも、大なり小なり主人公は僕自身の分身なのですが、沖縄戦の当事者ではない僕に、どうしたらリアリティが出せるのか、それを考え続けてきました。

ここ 20 年くらいの間ででしょうか。僕らが経験した『戦争の時代』と、どこか同じ空気が感じられるようになったと思っています。かつて日本人が犯した罪悪すらをも、肯定する人が増えてきていますね。それはひとつ、想像を広げる作業を、怠っている人が多いということなのだと思います。戦争を経験していない世代ももちろんだけれど、戦争を経験した僕だって、もっと想像を広げる作業をしていかなければならないと思うのです。

どうしたら戦争を肯定するような言説に対抗できるのか。僕にできることといえば、絵本を創ることしかありません。どういう絵本を創れば、警鐘を鳴らすことができるのか、常に考えています。」（童心社 HP より）

作家の池澤夏樹さんは AERA[巻頭特集]沖縄をもっと知ろう '22.5.16No.22 に寄稿されています。

「基地は減らない。復帰の時に言われたことは嘘ばかりだった。それは今も続いていて中央政府は欺瞞と強権に終始し、高裁以上の裁判所は沖縄の言い分をまったく聞かない。日本国憲法の上に日米安保条約があるのだからそうせざるを得ないのだろう。」（上記 AERA 巻頭言より抜粋）

ロシアのウクライナ侵攻から3か月余り。今、私たちはリアルタイムで映像を視聴しています。あのような戦闘風景が実際に沖縄の地上戦で行われていたということに思いを馳せ、この本を手にするすることで「想像を広げる作業」をしたいと思います。「戦争を肯定するような言説に対抗」するために。

6月23日は「沖縄慰霊の日」です。

イエスにならう生き方を求めて

悩みを持つ人々の痛みに寄り添い、
その悩みを少しでも分かち合うことのできる、
教会共同体をめざして

日本カトリック司教団著「いのちへのまなざし」
増補新版より

沖縄タウン フィールドワークに参加して

部落差別人権担当司祭 長崎壮(クラレチアン宣教会)



まんざもう おんなそん
万座毛(恩納村)

3月26日、大阪市大正区で部落差別人権委員会主催の沖縄タウン・フィールドワークが行われました。参加者の15人はなみはや教会に集合し、本土では沖縄出身者が一番多い地域といわれる大正区の沖縄移民の歴史に関連する場を巡り、日本人への同化と異化のはざまで揺れる葛藤の歴史を学びました。

沖縄移民にとってシンボリックな場所は尻無川河畔のクブンガー（沖縄語で窪地の意味）という場所です。本土の人に差別を受けた彼らがやむなく集合住宅を建設した低湿地帯で住居に適さない場所でした。劣悪な生活環境であったため、行政による強制立ち退き命令によって住民は追いやられ、ここからほど近い市営の改良住宅に住まわされました。こういった点は部落差別における行政の対処の仕方と似ているのかもしれない。

この他にも私たちは沖縄移民の歴史を知るうえで欠かせない場を巡りました。沖縄移民への差別問題に長年取り組んでいる二人の方の話を聞いたことはこの日の体験を深めるものとなりました。

フィールドワークの出発前には人権問題・差別問題と長年取り組んでこられた日本基督教団牧師の安田耕一さんから大正区へと移り住んだ沖縄移民の歴史的背景と現状について詳細にお聞きし、終わりには沖縄関係の資料館である関西沖縄文庫主催者の金城馨さんからお話を伺いました。金城さんの話で印象的だったのは、昔の沖縄人は日本人の考え方に迎合して生きるしか術はなかったが、彼自身は「沖縄人として日本人を生きる」ということを信条にしているということです。

おりしも当日は、ウクライナ危機が連日新聞やニュースを騒がせていた時期であったため、金城さんの「ウクライナはロシアに組み込まれたくないという心情は沖縄人にとっての日本人に対する心情と同じこと」との言葉には説得力があり、皆が共感しました。

異文化交流には葛藤はつきものですが、その中であって相手の文化的背景、そして人格を尊重することの大切さを学べたフィールドワークになりました。



尻無川河畔 クブンガー（窪地）の
説明を受ける参加者

正義と平和協議会全国集会大阪大会 2021 分科会主催者より

第3分科会

構造的差別……沖縄基地

梶原隆憲（堺教会信徒）

「正義と平和全国集会 2021 大阪大会」の第3分科会「沖縄の米軍基地を考える」で発題し、学びの講演者を大正区「関西沖縄文庫」を拠点に活動されている3人にお願ひしました。

かつて100年前から大正区に移住してきた沖縄人は、住居や職探しで差別され苦難を強いられました。

その少し前、1903年に大阪で開かれた内国勸業博覧会で、台湾人やアイヌの人達と同様に見世物として展示された「人類館事件」ではひどい侮辱を味わっています。

その様な差別的意識の中に本土と沖縄の関係があります。「金城」と言う名は本土ではキンジョウと読みますが、沖縄ではカナグスクと呼びます。本土は文明が進んでいてスピーディ、故にその社会に組み込まれなくてはいけないのか……。それは同化政策に似て、米軍基地の「沖縄に置く事をよし！」とする都合の良い多数派（本土側）の考えとしか言いようがありません。少数派の沖縄にとってはそうではないのです。

琉球併合、戦後の基地の沖縄への移転、1995年の少女暴行事件、「最低でも県外移設」等、薩摩侵攻から400年、沖縄に対する一連の歴史、また、遺骨の土砂を埋め立てに使う人道に欠ける行為、県民投票で反対が証明されても強行される辺野古基地建設……。構造的な差別が続いています。

講演者のお話を聞き参加者からは次のような感想が寄せられました。

- *我々は沖縄に甘んじていないか*沖縄では基地の事件が多発しているのに本土メディアは取り上げない
- *厚木基地とは住民の意識が異なる*現地活動中「基地を一つ持って帰ってくれませんか！」と言われた事がある
- *現状をもっと知る必要がある、自分の子どもにも伝えたい
- *多宗教者の方と共に行動したい*改善しない事で無力感を味わう
- *国のわらいは、国民が黙ってしまう事*やるしかない、何をやるか探し続ける事が大事
- *もともと本土から移転されたもの、今度は沖縄から本土へ戻す番だ
- *全ての教会が地元の議会に陳情すれば大きく広がる

現在、移転を考える私たちは都道府県・市町村議会に以下の内容で陳情書と意見書を送っています。

1. 沖縄を「捨て石」にした差別的な安全保障政策をやめること
2. 辺野古新基地建設を断念すること
3. 普天間基地は「本土」に引き取り、日本全体で問題解決すること

最後に、新聞記事にあった大正区の沖縄県人会長の話を借りたい。「沖縄復帰50年、この節目に多くの人が沖縄に注目して欲しい、沖縄をもっと理解して欲しい。そして、基地が今後も沖縄にある事が当然と思わないで欲しい。もう一度沖縄との関係に出会い直してもらいたい」。

1972年5月15日、沖縄の施政権がアメリカ軍から日本に返還されました。今年は50年目の節目を迎えるとあって、

さまざまな観点から戦後の沖縄を振り返る活動や日本復帰を記念する行事が数多く執り行われています。

ドルから円へ、右側から左側通行へ、日本との往来がパスポートを必要としなくなり、多くの変化に戸惑いながらも意識的あるいは無意識に日本への同化を進めてきた沖縄。そのような中で忘れられている、あるいは隠されている歴史の一つが「私宅監置」制度です。

1900年に制定された「精神病者監護法」によって、座敷牢や敷地内外に作られた小さな「監置小屋」に精神病者を隔離した事実がありました。「治安維持」を目的とし、知事の許可を受けて人権など配慮されず閉じ込めたのです。

明かり取りのための小さな穴を開けた壁に囲まれた畳三枚ほどの狭い小屋の中で食事も排泄もしなければならず、小屋によっては立つこともままならないほどの高さしかなく、出されたときは歩くこともできなかった人や、中には死んでからしか出ることができなかった人もいました。

「家畜のほうがまだまし」と言われたほどの劣悪な環境は、あまりにもひどいということで、戦後すぐの1950年に廃止されましたが、日本から切り離されてアメリカ軍統治下にあった沖縄では、日本国憲法の埒外に置かれ日本の法律が適用されなかったため、琉球政府によって1972年まで継続されていたのです。

日本では「もはや戦後ではない」として景気発展に浮かれていたころ、沖縄の精神病者の増加率が日本に比べ格段に多かったとの調査結果は、沖縄戦による過酷な体験が、生き残った人たちに如実に表れています。

本人も家族も誰も悪くないのに法律で隔離した制度は、当事者の自己責任にされ、自助、共助、公助を謳う国策の犠牲とされてきました。そして目に見える隔離は無くなったとはいえ、障がい者への、そして沖縄への差別・虐待は今も続いています。



監置小屋」跡（沖縄島北部）

＜お詫びと訂正＞

時報5月号6面「平和旬間の参考に」一覧表 「沖縄平和祈念資料館」の電話番号に間違いがありました。お詫びし、訂正いたします。

（誤） 03-3202-3844 → （正） 098-997-3844

シナピスニュース 3 月号のこの障がい者委員会枠のコーナーで、性的マイノリティーやジェンダーに関するテーマを連続掲載すると予告をしましたが、このテーマは別枠で扱うのが適切だとのことご指摘もあり、同枠での連続掲載は見合わせることにしました。

「エッフアタ（開かれよ） 1」考

さて、今回は障がい者の癒しに関する福音書の物語について、たびたび見聞きする説明のひとつ、障がい者の癒しを不信仰からの解放に喩えることの問題点をとりあげます。当委員会の M さんが以前に他稿で取り上げたテーマです。



福音書に登場する障がい者の癒しの物語を理解するとき、そこには様々な人の理解や視点が反映しています。第一に、イエスがどのような思いでそうしたのか、第二に、癒された当事者は体験をどう受け止めたのか、第三に、目撃した弟子や聖書記者は物語を通して何を伝えようとしたのか、第四に、聖書の物語を解釈説明する人は何を伝えたいのか、そして第五に、私たちは聖書や説明をどう理解するかなどです。

ここでは、第四・第五の解釈・説明・理解の枠組みについての問題提起です。

マルコ福音書 8 章 17 節では弟子たちの無理解を「見えない」「聞こえない」状態に喩えています。が、他の盲人の癒しの物語 7 か所（マタイ 9:27-32、12:22、20:30-34、マルコ 8:22-26、10:46-52、ルカ 18:35-42、ヨハネ 9:1-41 など）やろうあ者の癒しの物語一か所（マルコ 7:31-37）などでは観点・内容は異なっています。盲人やろうあ者の癒しは、当時の共同体から差別・疎外されサポートを受けにくい状態からの解放という側面があります。留意しなければならないのは、障がい者の癒しを不信仰からの解放の喩えとして理解説明するのは、現在障がい者の置かれた状態を不信仰と決めつけているのも同然ですし、無意識に人を傷つけ孤立させているということです。癒しの物語は、共同体が人を疎外しているなら、その構成メンバーがそれに気づき関係回復するように「エッフアタ！（開かれよ！）」との呼びかけかもしれません。

紙面の関係上この課題の続きや「障がいとは祝福？」という説明の問題について別の機会にふれたいと思います。このテーマを取り上げるにあたってはキャシー・ブラック著『癒しの説教—障害者と相互依存の神学』（教文館 2008 年）を参考にしました。ぜひ一読をお勧めします。なお、この書籍を購入し、視覚障害、肢体不自由、読字障害の理由で「テキストデータ」が必要な場合は出版社が提供することです。

新しい時代に

障がい者委員会 宮永久人

2019年の秋から世界にCOVID19が拡がり、コロナ禍の時代に突入した。このような時に私は頸髄損傷に倒れ、首から下が不随になってしまった。半年間にわたる入院生活の後、ヘルパーたちの支援を得て在宅生活を始めて、現在に至っている。

コロナ禍と自分の病の最中にあって、私は人々が連帯し、助け合う姿を見つめていた。そのために必要なのはコミュニケーションとその手段である。

退院して二週間ほどの土曜日の夕方のこと、私のiPadが突然鳴った。大阪教区の手話グループからのオンラインによる手話ミサの誘いだっ。苦しみのなかでの救いであり、闇のなかの光だった。涙して感謝した。その後、信者だと紹介されたヘルパーのKさんとの出会いもあり、それ以来一緒にこのオンラインミサに与るのは、私の救いと至福のひとつとなっている。

障害者・病者とともにささげるミサは、今年もオンラインである。それならば、と気づいたのだが、各小教区で日常的に行われているミサが、ネット上の会議システムで配信されるようになってもいいのではないか。

もちろん、キリストの食卓に与り、秘蹟を受けるには、教会に足を運ぶことが基本である。しかし、私のように頻繁にはミサに与ることができない者にとっては、オンラインミサは信仰生活を送っていくうえで、格好の手段である。私たち障害者のみならず、高齢者にとっても。そのうえで、後日、地区連絡員等が聖体を持参するようになればよいと思う。（ちなみに私の母は、高齢者施設に閉じ込められたままである）

人間は神から与えられた英知により、コロナ禍を乗り切る手段として、ネットの活用を進めた。福音宣教や信仰生活も新しい時代に即していい。



日本への避難が不可能になりイランで留め置かれたアリさん一家は今どうしているでしょうか。

福岡教区のアベイヤ司教が手を差し伸べてくださいました。アベイヤ司教はスペインの難民支援団体にかけあい、アリさん一家をスペインで保護する道を見つけて下さったのです。アリさんは難民申請に必要な証拠書類を集めて、スペイン大使館へ渡航ビザを申請に行くところまでこぎつけました。しかし、あと一歩というところで、アリさんはイラン人の仲介業者に騙されパスポートを失ってしまいました。パスポートのないアフガニスタン人は道を歩くことすらできません。不法滞在者としてすぐにアフガニスタンへ送還されるからです。

そんな中、アリさんは新たな支援の道を切り拓きます。

せっかく安全な第三国へ逃げる道が見えたのに、パスポートをだまし取られたアリさん。そんな彼にかけける言葉ありません。「どうしたらいいか私にはわからない。アリさん、あなたが日本の皆さんに語りかけたい言葉はありますか」。するとアリさんは、「ある、ありますよ、あるある！！」と威勢よく答えるのです。

実は4月、ある教会の方が「何にでも自由に使って」と匿名希望でシナピスに寄付をくださったことがありました。私たちはそのお金の一部をイランのアリさん一家8人分とアフガニスタン現地のこどもたち約10人分のために使わせてもらうと了承を得て、すぐにイランへ送金したのでした。アリさんは「お金をくださった人に言ってください。あのお金でね、イランまで逃げてきた人たちのために薬を買った。動画送ります」と言い、いくつもの家族の姿をSNSで送ってきました。



「この家族は昨日アフガニスタンからイランに来たばかり」「このこどもたちおなかすいて声が出ない」。へたり込んで押し黙る高齢者、女性、こどもの動画が次々と送られてきました。アリさんは、特に弱っている高齢者に買った薬の領収書も送ってきました。「私たちもみんなおなかすいてる。でもね、私たちおなかすくのは我慢できる。このおばあさん、病気、こっちのおじいさんも病気、動けない。これを見るのは我慢できない。だから先に薬を買いました。このこどもたち、笑わない。もしね、たった一日でもいいから食べさせてあげたら、幸せ。一回食べたら、そこから何日も生きることできる。」

「もし日本の皆さん助けてくれたら、私はイランの国境にいる人たちへ食べ物を配り、薬を買える。領収書と動画を送ります。どんどん送る。」これがアリさんから送られたメッセージでした。

取り急ぎ目標は10万円です。みんなでワンコインずつでも出し合ったら、達成できると思います。ワンクリックで送金できるクレジット寄付もあります。どうかよろしくお願いします。

※シナピスではHPからオンラインでも寄付を受け付けています。
詳しくはQRコードから。



5月の祈りの集い



シナピス主催第8回「祈りの集い～世界平和のために祈る～」を5月12日に行いました。

5月は聖母月ということで、マリア様の取次ぎを願ってロザリオの祈りを捧げました。集いの初めに松浦謙神父より「ロザリオの祈りとはマリアを崇拝するものでもアヴェ・マリアをただ唱えるだけのものでもなく、神様の生涯を思いおこし黙想しマリア様の取次ぎを願って神様に祈りを捧げるもの」だと説明がありました。それを心にとめ、第一の黙想では政治的為政者が真の知恵に導かれだれもが幸せに暮らせる平和な社会づくりに貢献できるように祈りました。第二の黙想では、世界中のすべての人のいのちと尊厳が守られ、隣人を大切に愛することが出来るよう英語で祈りを捧げました。第三の黙想では、わたしたちの祈りを必要とする身近なすべての人を思い浮かべ、それぞれ祈りを捧げました。多言語で皆と心を合わせて祈ることによって、自分の隣人を大切に、その話に耳を傾けることが世界平和に繋がるとより実感できた時間でした。

祈りの最後に生徒たちが歌う聖歌「私の祈りを聞いてください」を聴き、各自が静かに自分で祈りの締めくくりをした、より祈りに向き合える集いとなりました。



今回集いの最後に聖歌を捧げてくれたのは、ヴェリタス城星学園中学高等学校聖歌隊のみなさんです。

マスクをしながら歌うのはとても大変だったはずですが、一生懸命祈りを歌に乗せて捧げられました。生徒さんたちの力ある清々しい歌声に心が洗われる思いがしました。

みなさん、素敵な歌声を
ありがとうございました！



次回の祈りの集いは6月9日(木)20時半～
テーマは「沖縄のためにいのる」

去る5月15日、沖縄は「返還」50年を迎えました。
それぞれの祈りを捧げましょう。

Zoom ミーティング ID: 761 071 2034
パスコード: 123456





シナピスホーム便り



暑くなってきましたね。

ホームも、お越しくださるお客さまの熱気に包まれています。

先日、看板を作りました。皆さまをお出迎えいたします。

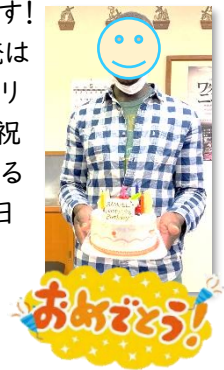
こちらを目印にお越しくださいませ。

山田 直保子



5月11日(水)

お客様が9人もお越しくださいました。今日もカフェは賑わいました。とても嬉しいです！一人の常連さんからは、ゴールデンウィークでお休みだったので「2週間どうしてた？俺は寂しかったです」と何より嬉しい言葉をいただきました。色々と話している中で、ナイジェリア人男性が本日バースデーだと判明。慌ててケーキを買いに行ってもらい、みなでお祝いしました。とても喜び、満面の笑みを浮かべていました。問題はとてつもなくたくさんあるし、私たちはとても厳しく彼に接するけれども、こういう時はみんな何もかも忘れて誕生日を一緒にお祝いできるのはどんなに幸せな事か、きっとわかっていると思います。生まれて来てくれてありがとう。みんなも彼との関わり合いは色々あれど、心から笑顔でお祝いしてくれました。



5月14日(土) 過去最多記録 12名のお客様来訪！！

本日はコリアボランティア協会の「モヨラ」さんによる、沖縄の三線や朝鮮の打楽器チャンゴなどによる演奏会有り、大盛況でした。

12時の時点ではもう6人お越しいただき、みなでてきぱき動き、12時過ぎにはスタッフが来てくれたのでお客様をお任せして、私もキッチンに入りました。

ランチはブラジル人男性が担当のブラジル料理のフェイジョン。過去最高の出来栄え！

皆さんとても喜ばれていました。ランチをお出しする際に「ブラジル料理のフェイジョン」と説明してほしいのですが、シャイな彼は「恥ずかしい恥ずかしい」と顔を真っ赤に…。私が「フェイジョンです」と説明して、そのあと彼が「日本ではご飯とみそ汁でしょ。ブラジルではご飯とフェイジョン。みそ汁と同じ」と真っ赤になりながら大量の汗を吹き出しながら説明してくれました。

コリアボランティア協会の方はオープンと同時に来られ、11時半ごろランチをお出ししました。とても美味しいと言ってください、完食されて、ブラジルの習慣などを彼がお伝えして、話が盛り上がりしました。



難民移住者が、舞台をセッティングし、「モヨラ」さんによる演奏会は14時前に始まりました。

ギターと三線、チャンゴを使って5曲ほど演奏して下さいました。力強い曲や、優しい曲。楽器の演奏も素晴らしいかったです。お二人の歌声も本当に素敵でした。最前列で真剣に聞いているシスターたち。メロディーに合わせて身体を揺らしている人たち。皆さんご自分の思うように演奏に身を任せて聴き入っておられました。

沖縄の音楽、朝鮮の音楽。スマホで動画を撮っている難民移住者。お客さんの様子をみながら、そっとお客さんに声をかけることができた難民移住者たち。

音楽の力は言葉の壁を越え、誰もが楽しめるんだと実感しました。今後も時々、こういうイベントをしたいと思いました。



本日お越しくださったお客さま方



近くのお告げのフランススコ姉妹会の3人のシスターは、重いお米を持ってきて寄付してくださいました。「以前玉造に行ったときに、スタッフの方からホームのことを聞きました。こんな近くにこんなところがあるって知りませんでした」と話してくださいました。ランチも完食されて、「来月 18 日はスリランカのカレーですよ」というと「辛いのが好きなの！来月も来ていいかしら」と言ってくださいました。他のお客様と談笑したり、演奏会も楽しんでくださいました。「モヨラ」さんのおひとりは三線を教えたり触らせてくださったので、シスターたちも喜んで写真を撮ったりしておられました。

先月、11時に料理が完成していなかったことを知っていた方は「ちゃんと間に合ったんですね」と開口一番心配してくださいました。

南地区の社会活動委員会の時にお話しさせて頂いたのがきっかけで、生野教会の信徒の方も早速来てくださいました。生野教会もコロナ前は一年に一回楽器を使った演奏会を開催していたそうです。「モヨラ」さんの演奏を聴きながら、「コロナが収まって開催することがきいたら演奏してほしいな」と話されていました。今年の社活の集いで私の病気の話を聞いて「すごいインパクトでした」と言ってくださり、難民さんとの再会話でまたうるうるしたり、そして今現在私が元気になったことをとても喜んで下さいました。



玉造に住んでおられて昔シナピスで難民さんのボランティアをしたこともあるご夫婦は、スリランカ人女性に「今、スリランカ大変ですね」と気遣って下さりました。彼女は「そうそうー」とスリランカの現状を伝えていました。

お客さんが帰られたあと、難民移住移動者のみんなに「疲れたでしょ」「お疲れ様」と声をかけていくも「今日はたくさんお客さんきてくれた」「楽しかった」「時間がたつのがあっという間だった」などなど、みんなは本当に嬉しそうに話していました。そして、私が何も言わなくても、みんなで今日の良かったこと、反省点を話していたんです。

Aさん：スリッパがなかったから、前につかっていたスリッパを出したんだよ

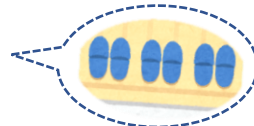
Bさん：スリッパがなくなる（足りなくなる）なんて初めてじゃない？

「なおこさん、スリッパ買ってー」などなど

最近お客様が少しずつ増えてきたのもあり、常連さんも移住者の名前を呼んでくださったり、いなかったら「〇〇さん最近見ないけどどうしてるの？」と心配してくださったり。「顔見知り」の存在が出来ていく喜びも彼らが頑張ろうと思える大きな一つの理由になっています。

少しずつですが、ホームがあって、カフェを開催することによってこの場所に必要とされる難民移住者が出迎え、その難民移住者たちに何ができるだろうかといつも考えて下さるお客様が来て下さり、形になってきたような気がします。まだまだ至らない点だらけですが、どんどん進化していくホームにぜひぜひ遊びに来て下さいね。

次回 6 月ランチ付き土曜開催は 18 日です。難民移住者たちがニコニコとお待ちしております。



ちょっと 聞いて

教会共同体のみなさまの
さまざまな取り組みを
ご紹介いたします。
「ちょっと聞いて」「聞かせて」
そんなふれあいの場になったら
いいと思います。

門真教会の小野さんからコロナ禍で活動が停止していましたが、
子ども食堂再開のご報告をいただきました。
これは、教会や地域の掲示板に貼り出すために作成されたポスターです。

みんな集まれ！ごはんの時間だよ！

カトリック門真教会からの子ども食堂報告

5月18日（水）16：00～19：00 カトリック門真教会において
2年ぶりに子ども食堂を開催しました。たくさんの子どもたちが
参加し、にぎやかな会になりました。料理を用意してくれた皆さん
に感謝します。次回は 2022年6月15日（水）16：00 からです。



←メニューは、「しらす炊き込みご飯、ヨモギの天
ぷら、新玉ねぎ焼きです。」などです。

門真市公益活動補助金による活動です。

お手伝いできる方募集中！

問い合わせ先

おかず食堂こども会

船瀬 愛子 携帯番号 090-3940-6851

投稿欄 “ガリラヤの風”



「もう一つの沖縄の歴史 ～映画『海の彼方』を見て～

K. A

今から 20 年以上前に石垣島を旅したことがあります。そのころはまだ台湾と石垣島を結ぶフェリーが出ていて、現地の人が「この辺の人は本土じゃなくて台湾に買い物に行くんだよー」と話していたのを覚えています。その石垣島と台湾の深い結びつきを「海の彼方」という台湾のドキュメンタリー映画を見て初めて知りました。

日本が台湾を植民地統治していた 1930 年代、台湾から石垣島に 60 世帯およそ 100 人の農民がやってきました。この台湾からの移民が沖縄にパイナップル栽培と水牛耕作をもたらしたそうです。「海の彼方」は、この時に渡ってきた家族とその子どもたち、孫たちの物語です。主人公の玉木さん一家は石垣島で八百屋を営んでいます。語り手の孫世代の慎吾さんは東京で活躍するミュージシャン。おばあさんの玉代さんが米寿を迎え、日本各地で暮らす子ども、孫たちがお祝いのために石垣島に戻ってきます。映画を見ていくと、穏やかに笑うおばあさんやこの一家が、時代に翻弄され村では差別にさらされてきたことが明らかになっていきます。日本の敗戦後、「日本人」にされていた台湾出身の人々は国籍を失い、1972 年に沖縄が日本に返還されるまで無国籍の状態でした。こどもたちは台湾人とも日本人とも、沖縄人とも認められず学校や村では「タイワン!」といじめられ、結婚差別もあったそうです。親たちが必死で働く背中を見つめながらも、台湾にルーツを持つことはこどもたちにとって生きにくさの原因でもあったのです。

玉木さん一家はおばあさんの里帰りを計画し、娘たち、孫たちとともに台湾を訪れます。70 年ぶりの台湾はおばあさんにとっても異国のよう。でも懐かしい家族や親せきは温かく玉木さん一家を迎え入れました。見ていて印象的だったのは、同行した孫たちが、台湾は初めてで言葉もわからないけれど、親戚の家でもてなされた料理が家で食べてきた味と一緒に語った言葉です。親や祖父母の言葉はわからなくても、自分のルーツがどこにあるのか曖昧になっても、脈々と日々の暮らしの中に受け継がれていくもの。国や時代を越えて結びつく家族の姿がとても印象的でした。おばあさんのお祝いで日本中から石垣島に集まったこどもや孫たちはおよそ 100 人! この玉木さん一家や同じように台湾から渡って日本で家族を築いていった多くの人々、そして同じ時期に沖縄から移民としてブラジルや他国に渡っていった人々の暮らしもまた、沖縄の歴史であり日本の歴史であるのだなと思いました。

「海の彼方」2016 年製作（台湾・日本）監督：黄インイク監督 販売元：マクザム（2018年）



イエスならばどのように行動するだろうか

北川 光裕 (香里教会)

フランシスコ教皇による 2022 年復活祭メッセージにて、盛り込まれた世界情勢の中では細やかな扱いながら明白に彼の政治的態度的変化が読み取られる内容が目を引きました。

「カナダのカトリック教会が歩んでいる先住民族との和解の道」これは、カナダの先住民の子どもたちが同化政策として強制的に住まわされたカトリック運営の寄宿学校の跡地から昨年 215 体の子どもの遺体が発見されたことに端を発した一連の事件で、4 月 1 日に教皇が先住民の代表団と面会し謝罪したことに纏わるものでしょう。

2015 年 7 月に教皇は、南米を植民地化したカトリック教徒が先住民に対して行った犯罪について、踏み込んだ表現で謝罪をしています。しかし、周知のように、2019 年 3 月、侵略から植民地の時代における人権侵害に対するメキシコ政府による謝罪要求に対しては、スペイン政府による断固拒否の姿勢を慮ってか、バチカンでは正式な返答を避けてきました。

また、同年 6 月 9 日付で聖霊降臨の主日に際して出された教皇メッセージでは彼の歴史認識が疑われます。「イエス・キリストのうちに人となられたみことばは、歴史となり、文化ともなりました。キリストと普遍教会から離れ、コロンブス以前の時代の宗教をよみがえらせることを理想とすることは、前進ではなく後退です。それは、歴史上の過去のある時点への退化にほかなりません」これは同メッセージの中で 2007 年の前教皇の発言の引用であることを示した上でフランシスコ教皇自身のことばとして述べられたものの一部です。

真意はともかく、彼が国際的な人権意識の拡充やコロニアリズムに対する批判の高まりに通じていなかったとは到底言えません。真摯に歴史と向き合った 2015 年の彼の行動を政治的パフォーマンスだと揶揄されないためには、宣教の名の下で為された全ての人権侵害に対する歴史的責任を恒常的に追及する姿勢が必要です。幸い 2021 年 9 月に教皇はメキシコ政府への書簡にて「極めて痛ましい過去の誤りも認める」と記し、スペインがアステカを征服した際にカトリック教会が先住民への迫害行為を行ったことを事実上謝罪しました。冒頭の経緯がこの望ましい傾向の流れにあることを願います。

カナダのトルドー首相は「謝罪は歴史的過ちを正すために過去の真実を認める一歩だが、まだなされるべきことがある」と述べています。それは、捜査に全面的に協力し犯罪者に司法当局の公正な裁きを受けさせることでしょう。

これは当然ながら聖職者らによる性的虐待の問題にも言えることです。



シナピス工房 だより

ジュートたわし リニューアル!

みなさまにご愛用頂いているジュートたわしが、この度リニューアルしました。これまでのジュートを編んだものから、ジュートのコーヒー袋を洗ってほどいて縫い合わせました。

ジュートたわしは、麻の一種であるジュート（黄麻）で編んでおり、乾きやすく、少しの汚れなら洗剤無しでも落とせる優れものです。天然素材のため土に戻ります。脱プラスチックを目指し、環境に優しいエコたわしを是非お試しください。



洗って♪

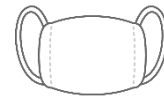


干して♪



※材料のジュートのコーヒー袋は姫路地区佐用教会の清水方恵さんが寄付をしてくださいました。

みなさん、「アベノマスク」を覚えておられますか？



2020 年マスク不足解消のため莫大な税金を投入して制作されたものの、小さいと不評で、実際に国民に郵送され始めた頃には十分なマスクが市場に出回り大量在庫を抱えてしまいました。保管にも多額の費用がかかることから廃棄されそうになりましたが、国民の反対もあり、2021 年 11 月から厚生労働省が無料配布申し込みを募りました。

シナピスはいち早く申し込み、先日ようやく 1000 枚が届きました！ 私たちはこの社会問題を忘れないためにも、布資源を大切にするためにも、日々手にする布巾にリメイクをすることにしました。

難民移住者、支援者が一生懸命ほどこ、心を入れて縫ったリメイク布巾をどうぞお試しください。



マスク



ほどこ



布巾になりました♪

※ご購入の方はシナピスまでご連絡をください。

みんなのけいじばん

♡♡♡いつもありがとうございます♡♡♡



今月も、多くの方々からご寄付を頂きました。マスクや婦人服、新鮮な玉ねぎやじゃがいも、テレビや机、食器などの貴重な物をたくさん届けてくださいました。

ちょうど自立する人たちがいたので、早速家電や食器を新居で使わせていただくことが出来ました。食料品は移住者や生活に困っている方々と分けて頂きました。

みなさまのご協力に心から感謝申し上げます。



つながります

最近シナピスに手芸用品の寄付の連絡が増えています。品物は巻物の大きな布からパッチワーク用のハギレ、レースやリボン、手芸の本など様々です。

先日も上質なウールの反物の寄付のご連絡を頂きましたが、あいにくシナピス工房では取り扱えずお断りをしました。

その際に「どこか別の団体や小教区の手芸部で必要とされる方がいたら紹介してください」と言われました。

ある人にとっては不必要なものでも、ある人にとっては必要なもの。今後はこういう「つなぐ」役目もしていきたいと考えています。

手芸用品が必要な方、団体をご存じの方、シナピスまでご連絡をお願いいたします。



ご寄付をお願いします



お家に眠っている映画やドキュメンタリーのDVD や本、みんなと分かち合いたい資料などありませんか？

ご寄付をして頂けるものがあればシナピスまで

！報告！

ニュース 5 月号に掲載しましたカトリック垂水教会信徒の方の投稿、「猫の里親探し」ですが、無事に里親が決まったそうです。関心を寄せて頂き感謝いたします。



連絡先:

カトリック大阪大司教区社会活動センター・シナピス
〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22
TEL 06-6942-1784 FAX 06-6920-2203
Email: sinapis@osaka.catholic.jp



コロナに負けず、今年こそ実現させたい！ こんな集いを考えています！

日本のカトリック教会は、8月6日～15日までの10日間を特に戦争や平和について思いめぐらし、考え具体的に行動する日々として「日本カトリック平和旬間」と定めています。

この期間には多くの小教区で様々な工夫を凝らした取り組みがなされる予定です。

今回は巻頭言を執筆してくださった川邨裕明神父よりお知らせを頂きましたので、ご紹介させていただきます。

「平和への祈り」 & 「平和の集い」 日時：8月6日（土）午前9時～



芦屋市役所前 午前9時～

「平和への祈り」

（当日参加またはライブ配信参加、アーカイブ配信あり）

司式：若林一義牧師（日本キリスト教団）



----- 300メートル -----



カトリック芦屋教会 午前10時半～

「平和の集い」

（当日参加またはライブ配信参加、アーカイブ配信あり）

- ・今年の平和学習の報告
- ・劇団「ういっしゅ」による沖縄戦を舞台にした「さとうきび畑」上演
- ・沖縄で活動する夫婦デュオ「ちむぐくる」ライブ

※入場無料ですが、費用捻出のためとウクライナ支援のために募金をします。みなさま是非ご参加ください。

川邨神父様からメッセージ：

「どのような沖縄を共有できるか、今から楽しみにしています。」

シナピス オンライン祈りの集い



～世界平和のために祈る～

6月9日(木) 20:30～(30分)

テーマ: 沖縄のために

開催方法: Zoom (100名まで参加可能です)

参加用 ID&パスコード、QRコード →

ミーティング ID : 761 071 2034

パスコード : 123456



活動へのご支援ご協力

よろしくお願いいたします。

郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪大司教区シナピス



難民移住移動者支援もよろしくお願いいたします。



支援物資提供のお願い

米、缶詰、ハラル食品、レトルト食品
テレフォンカード、不織布マスク

お電話をお待ちしています!!

☎06-6942-1784



HP はこちらから▶

<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>



あとがき

摩文仁の丘に刻まれた戦争犠牲者の名を前に、手を合わせる人たち。『復帰』を待ち望み、期待していたものがガラガラと音をたて崩れ落ちた。沖縄には平和憲法はない」と空を見上げながらつぶやくおじい。「戦はもう二度と起こしちゃいかん、ぬちどう宝、ぬちどう宝」と手を合わせ祈るように口ずさむおばあ。

「あなたがた、本土の人間は、沖縄をどう、思っているんですか。私たち沖縄人の痛みがわかりますか。あなたの方の頭の上を毎日、オスプレイが我が物顔で飛んでいますか。想像してみてください。すぐに戦場となるんですよ沖縄は。そして一番に犠牲になるのは本土のあなたたちじゃない、わたしたちなんですよ。」4年前、ある方にそういわれた。

6月23日の沖縄慰霊の日に沖縄戦で亡くなった与那原の住民1,969人ひとりひとりの名前を呼ぶ「与那原戦没者の名前を呼ぼう」が行われる。沖縄戦の記憶を消さないよう、またこの地で戦争が起きないよう、町民有志が心を込めて戦没者の名前を読み上げるという。そしてまだ、あちらこちらで名前がわからないまま土に埋もれている遺骨が眠っている。

戦争は終わっていない。(H)

▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

◆広報活動

- ・教皇メッセージ、司教団メッセージ等社会活動の指針の伝達
- ・読者と教会内外の社会活動をつなぐ機関誌としてシナピスニュースを発行

◆大阪教区・社会活動委員会との連携

◆学習会研修会の企画

◆こども基金

世界・日本のこどもたちへの援助

◆カトリック中央協議会との連携

正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、カリタス、部落差別人権委員会に委員を派遣

◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ

◆難民移住移動者支援

難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル

☎ 06-6941-4999

アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22

カトリック大阪大司教区事務局内



●公共交通機関ご利用の場合

JR 森ノ宮駅より 約 1000m

地下鉄中央線森ノ宮 2 番出口より 約 800m

JR 玉造駅より 約 1000m

地下鉄長堀鶴見緑地線玉造 1 番出口より約 800m

●車でお越しの場合

阪神高速 13 号東大阪線法円坂出口

法円坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします

郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪大司教区シナピス



忘れない＊あきらめないカレンダー

どんな状況下でも、忘れず、あきらめず、希望をもって歩む皆さまに、情報を配信します。



2022年 6月 の 案 内

★印 カトリック関係

2022年 祈禱の信徒 祈りの意向 6月

教皇の意向:家庭

全世界のキリストの家庭が、無条件の愛を身をもって体験し、日々の生活の中で聖性を高めていくことができますように。

日本の教会の意向: 地球環境保護

人間の活動による環境破壊や気候変動の影響による自然災害の被害にあった人々を支援し、地球環境を保護する取り組みを推進していくことができますように。

5	日	世界環境デー [UNEP] 違法・無報告・無規制に行われる漁業との闘いのための国際デー ●第27回統一マダン生野 ■場所: 異公園(ロート公園・予定) 12時～ 参加無料 主催: 第27回統一マダン生野実行委員会 連絡先Tel06-6711-6377 fax06-6711-6378 ✉ikuno@madang.jp
6	月	●戦争あかん!ロックアクション御堂筋デモ ■場所: 新町北公園 18時半集会 19時10分デモ出発 主催: 戦争あかん!ロックアクション 連絡先Tel090-5063-0073
7	火	世界食の安全デー
8	水	世界海洋デー
9	木	●「参議院選挙直前 テレビには出られない テレビでは言えない 2人によるコラボ」 ■場所: 大阪市立西区民センターホール 18時開場 18時半開演 第一部: 佐高信さん(作家)「聞くだけの岸田」が進める『新しい資本主義』を斬る 第二部: 西谷文和さん(ジャーナリスト)「言うだけの吉村」が進める大阪カジノのウソを暴く 資料代: 500円 主催: 路上のラジオ 連絡先Tel06-6170-4757 ✉nishinishi@r3.dion.ne.jp
10	金	●学習講演会「維新の会の虚像と実像」 ■場所: 豊中市立生活情報センターくらしかん 18時半～20時半 講師: 幸田 泉さん(ジャーナリスト・作家) 資料代: 500円 主催: 安保法制の廃止と立憲主義の回復を求める市民連合・豊中 連絡先Tel090-4033-1376 (松岡)
11	土	★水平社宣言100年シンポジウム「人の世に熱あれ 人間に光あれ」 ■場所: サクラファミリア 14時～17時 シンポジスト: 朝治武さん(大阪人権博物館館長) 駒井忠之さん(水平社博物館館長) コーディネーター: 松浦悟郎(名古屋教区司教) 参加費無料 主催: カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター 日本カトリック部落差別人権委員会 連絡先Tel075-366-6609 fax075-366-6679 ✉buraku@kyoto.catholic.jp ●#つなごう改憲時反対連続講座第2回 「教育と憲法 子どもが学ぶ権利か? 国が押し付ける教育か?」 ■場所: 難波市民学習センター 14時 講演: 冠木克彦さん(弁護士)「教育と憲法」(仮題) 会場費: 500円 ZOOM参加あり 主催: リブ・イン・ピース☆9+25 連絡先Tel090-5094-9483 ✉info@liveinpeace925.com
12	日	児童労働に反対する世界デー ●ドキュメンタリーを見て語ろう ■場所: 大阪市立北区民センター 18時～20時半 上映: 「忘れられた戦後補償」(NHKスペシャル) 「自衛隊が体験した離島防衛のリアル」(BS1スペシャル) 会場費300円 主催: 映像で現代を語る会 問合せTel090-5151-9763 (中森) ●阪神・市民放射能測定所 9周年企画 講演学習会 「放射性物質処理汚染水の海洋放出は止められる」 13時半～16時 ■場所: 西宮市勤労会館第8会議室+オンライン 汚染水の海洋放出は避けられる～その現実的な選択肢 講師: 川井康郎さん(原子力市民委員会原子力規制部会・プラント技術者の会) オンライン(ZOOM)参加ご希望の方は、測定所のメルアドにメールください。後日URLをお送りします。 申し込み: ✉shs.hanshin@gmail.com http://hanshinshs.blog.fc2.com/blog-entry-293.html 問合せ: 「子ども脱被ばく裁判」を支える会・西日本 事務局 後藤由美子 Tel090-3611-0162 Emai wishmill-yume@kouenji-hou.com
13	月	国際アルビニズム(白皮症)啓発デー
14	火	世界献血デー
15	水	世界高齢者虐待啓発デー
16	木	家族送金の国際デー
17	金	砂漠化および干ばつと闘う国際デー ●「南西諸島の自衛隊ミサイル基地化を問う!」 ■場所: 大阪市北区民センター 18時半 講師: 土岐 直彦さん(ジャーナリスト) 入場料 無料(資料代500円) 主催: 南西諸島への自衛隊配備に反対する大阪の会 連絡fax06-7777-4925 市民共同オフィスSORA気付 facebook https://www.facebook.com/groups/264368708181482
18	土	持続可能な食文化の日
19	日	紛争下の性的暴力根絶のための国際デー
20	月	世界難民の日
21	火	
22	水	

23	木	国連パブリック・サービス・デー 国際寡婦の日
24	金	
25	土	船員デー
26	日	国際薬物乱用・不法取引防止デー 拷問の犠牲者を支援する国際デー ●戦時性暴力をテーマにした作品 南澤あつ子一人芝居 ■場所:スペースふうら 13時半開場 14時開演 上演:「市長公室の木村さんが」アフタートーク:方清子さん(日本軍「慰安婦」問題・関西ネットワーク) チケット 要予約・当日清算のみ 前売り・当日共に2000円 主催:「あの少女・木村さん」関西上演実行委員会 申込先t.090-1223-7120(平日12:00~18:00) ✉2022fuura@gmail.com
27	月	零細・中小企業デー
28	火	
29	水	熱帯地域の国際デー
30	木	国際小惑星デー 議会制度の国際デー

